

# 東北地方における縄文時代中期末葉から後期前葉に関する土器編年 —宮城県石巻市山居遺跡の調査成果から—

相原 淳 —(東北歴史博物館)

- 
- |           |            |
|-----------|------------|
| 1 はじめに    | 4 出土土器について |
| 2 山居遺跡の概要 | 5 まとめ      |
| 3 層位と検出遺構 | 引用・参考文献    |
- 

## 1 はじめに

筆者は平成20年11月16日(日)に当館オープン講座において「石巻市山居遺跡の調査成果—縄文時代中期後葉から晩期中葉にかけての低湿性遺跡の調査—」について発表する機会を得た。内容については以下の3点であった。

- ① 層位と検出遺構・出土土器
- ② ツルマメ混和土器
- ③ 山居遺跡の性格

今回、ここでは特に縄文時代中期末葉から後期前葉の土器編年に関する部分を主要な論点として述べる。なお、山居遺跡の報告書は2007年に宮城県文化財調査報告書第214集として刊行されている。

## 2 山居遺跡の概要

山居遺跡は宮城県石巻市桃生町倉<sup>ものう</sup>塚<sup>くらぞね</sup>字山居に所在する(第1図)。縄文時代中期後葉から晩期中葉にかけての低湿性遺跡が、旧北上川と新北上川が分岐する茶白山(標高154m)を刻む山居沢の出口部分、沢底-3~4m(標高8~9m)において発見された。

遺構の種類は堰状遺構・杭跡・土壙等で多くはないものの、宮城県内でははじめての縄文時代カゴ断片の発見をはじめ、多量のトチノキ種子碎片等を含む廃棄層が検出され、水辺の作業場の一端が明らかとなった。



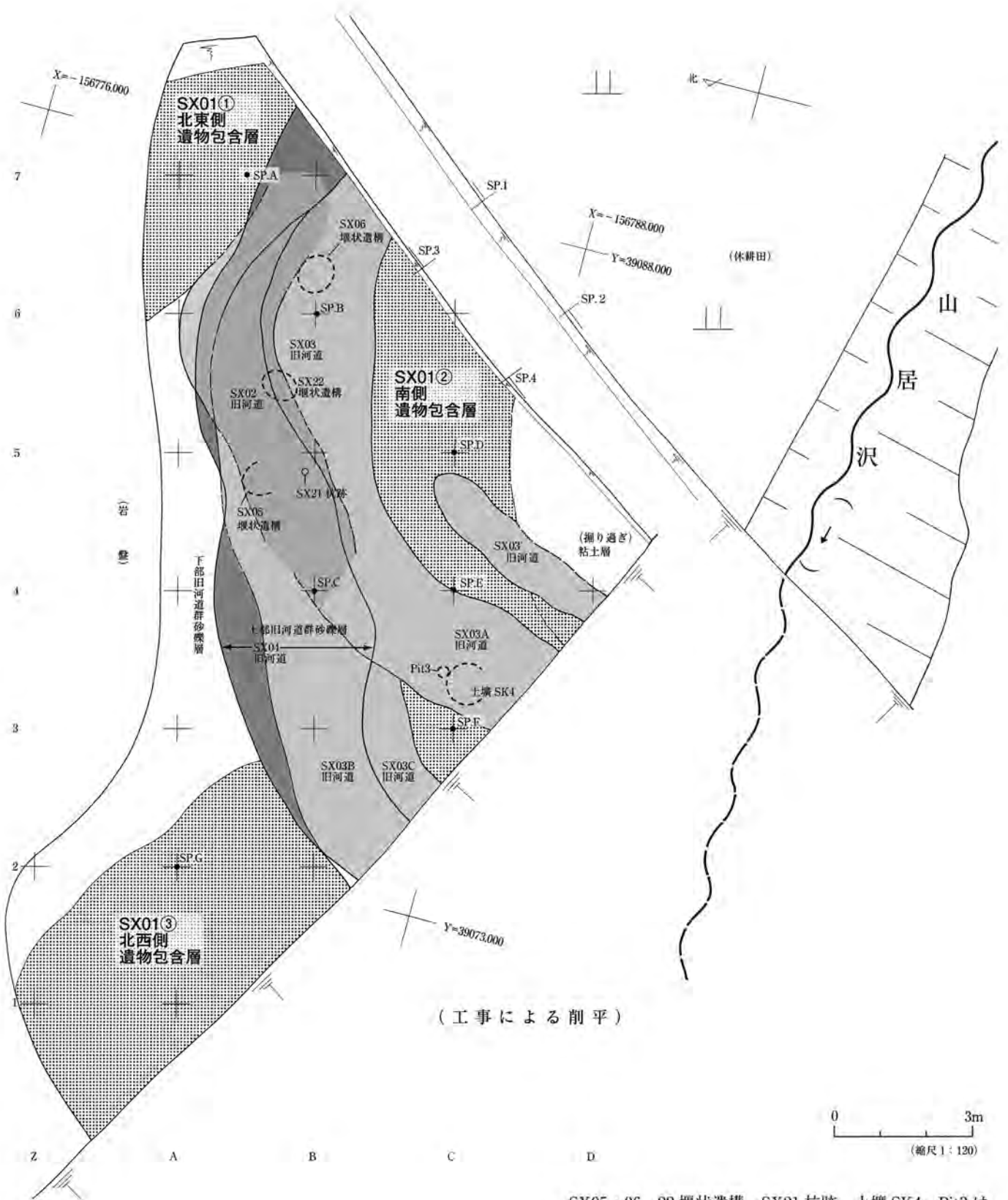
第1図 遺跡の位置

## 3 層位と検出遺構

第2図は遺跡全体の遺構配置図、第3図は基本層序とその関係を模式的に示したものである。

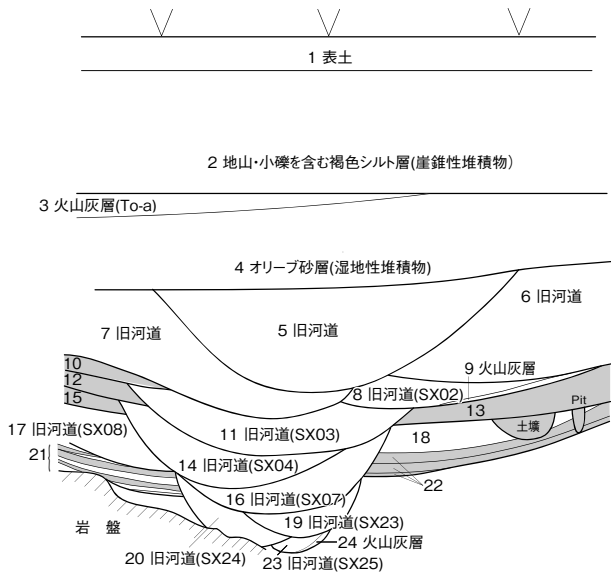
縄文時代晩期中葉の旧河道SX03・SX04を堰き止める形でSX06・05堰状遺構が検出された。遺構の残存状況は必ずしも良好ではなく、基底の一部が残存していたものと見られた。これらの旧河道の両側に、トチノキ種子碎片を多く含む遺物包含層(SX01①北東側遺物包含層・SX01②南側遺物包含層)が形成されていた。

後期後葉では、旧河道SX07の岸辺にSX21杭状遺構が確認された。SX01②南側遺物包含層では2b



SX05・06・22 堰状遺構、SX21 杭跡、土壘 SK4、Pit3 は上部旧河道群砂礫層下の位置を示している。

第2図 山居遺跡遺構配置図



層順	遺構	時期	土器
1	表土		
2	褐色シルト層		
3	灰白色火山灰層 (To-a)		
4	オリーブ砂層 (湿地性堆積物)		
5	砂礫層 (旧河道堆積物)		
6	火山灰層 (ブロック状)		
7	SX01 ①北東側遺物包含層	晩期中葉	第Ⅰ群
8	砂礫層 (旧河道 SX03 堆積物)	SX06 堰状遺構	
9	SX01 ②南側遺物包含層 2a 層	晩期中葉	第Ⅰ群
10	砂礫層 (旧河道 SX04 堆積物)	SX05 堰状遺構	
11	砂礫層 (旧河道 SX07 堆積物)	SX21 杭状遺構	
12	砂礫層 (旧河道 SX08 堆積物)		
13	SX01 ②南側遺物包含層 2b ①層 ~ 2a ①層上面	土壌 SK4・Pit3	後期後葉 第Ⅱ群
14	SX01 ②南側遺物包含層 2b ①層		後期中葉 第Ⅲ群
15	砂礫層 (旧河道 SX23 堆積物)		
16	砂礫層 (旧河道 SX24 堆積物)	SX22 堰状遺構	
17	SX01 ③北西側遺物包含層		後期前葉 第Ⅳ～Ⅵ群
18	SX01 ②南側遺物包含層 2b' 層・2c ~ 3a 層		後期初頭 ~ 中期後葉 第Ⅶ～第Ⅹ群
19	砂礫層 (旧河道 SX25 堆積物)		
20	火山灰層		

第3図 基本層序模式図

①～2a ①層上面でこの時期の安定面が検出され、多くの廃棄された土器とともに台石などが確認された。土壌1基とピット1個の掘り込み面もこの安定面と考えられた。

後期中葉では、旧河道 SX24 中から SX22 堰状遺構が検出された。遺物包含層は水の影響を受けた砂礫層となっており、残存状況は良くない。

後期前葉では、遺物包含層が調査区の北西側で検出された。遺物包含層は薄い砂層の介在する有機質黒色土層で、土器の出土状況は概して良好で、横倒しにつぶれた状態の略完形土器を含んでいる。

後期初頭～中期後葉では、南側遺物包含層の下部 (2b'・2c～3a 層) が該当する。真上や斜め方向に押しつぶされた状態の土器とともに、おびただしい量の土器が出土している。最下の 3b 層上面では、横倒しの状態で土器が1個体出土している。

#### 4 出土土器について

出土土器は調査区では縄文時代晩期中葉～中期後葉を主とし、このほか弥生時代後期の土器が1片検出されている。この弥生土器は調査した中では一番新しい旧河道 SX02 堆積層中<sup>(註1)</sup>に含まれていた。

この他の土器は出土層位と土器の特徴から、第Ⅰ～Ⅹ群土器に分けることができた。

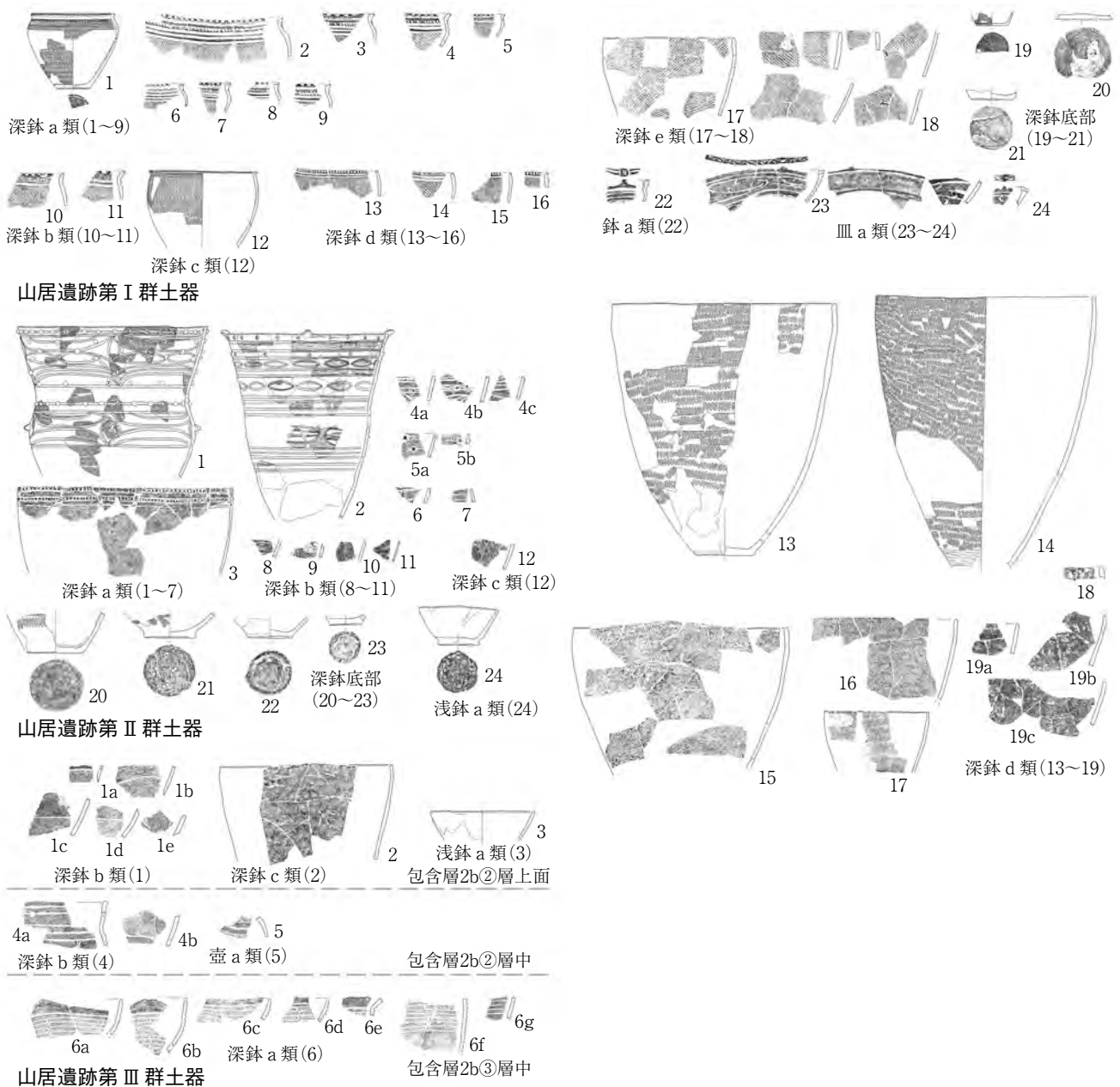
##### 〔第Ⅰ群土器〕

第Ⅰ群土器は縄文時代晩期中葉「大洞 C2 式」(山内 1930) 後半期 (藤沼 1989・須藤 1998) のものと考えられた。

年代測定を行った旧河道 SX03 内 SX06 堰状遺構底面から出土した土器 ISK-5 の校正暦年代は calBC770 (Beta-219644)、および旧河道 SX04 内 SX05 堰状遺構底面から出土した土器 ISK-6 は同じく calBC760 (Beta-219645) とほぼ同じ年代幅に収まるものであった。大洞 C2 式土器の他遺跡の測定例では、岩手県の資料で calBC900～calBC780 (小林 2006) が示されており、概ね矛盾がないものと判断される。また、現在考えられている縄文時代の終末 (大洞 A' 式) の calBC450～calBC250 の年代観とも整合している。

##### 〔第Ⅱ群土器〕

第Ⅱ群土器は縄文時代後期後葉の「金剛寺式」(伊東 1957) と呼ばれる土器型式にあたり、近年の研究成果によるのであれば、「宮戸Ⅲ a 式」(後藤 1957・須藤編 1995) に相当するものである。前章において触れたように、SX01 ②南側遺物包含層の 2b ①～2a ①層上面で安定面が検出され、多くの土器が出土している。ごく少量の宮戸Ⅲ b 式土器が SX01 ①北東側遺物包含層 ii a 層や SX01 ②南側遺物包含層 1c 層・2a 層上面から出土しているが、これらは層位的



第4図 山居遺跡第 I 群~第 III 群土器(縄文時代晩期中葉~後期中葉)(スケール 1:12)

にもまとまるものではない。

炭化物による年代測定は行っていない。

〔第 III 群土器〕

第 III 群土器は、縄文時代後期中葉の「宝ヶ峯式」(伊東 1957、志間・桑月 1991)や「宮戸 II a 式・II b 式」(後藤 1957)と呼ばれる土器型式に相当する。「宮戸 II a 式」から「宮戸 II b 式」への変遷は SX01 ②南側遺物包含層の 2b ③層中~2b ②層上面にかけての出土土器の様相において概ね把握されるが、SX01 ②南側遺物包含層の 2b 層は水の影響を受けており、参考資料に留めるものとした。

炭化物による年代測定は行っていない。

〔第 IV 群土器〕

第 IV 群土器は多条沈線文や磨消縄文を特徴とし、縄文時代後期前葉の「南境式」(伊東 1957)の一部をなすものである。後藤勝彦による南境貝塚 8 トレンチの分析では第 4~6 層の「宮戸 I b 式より新しい土器群」(後藤 2004・2005)に相当する。これらの土器は型式名称こそ異なるものの、福島県の「綱取 II 式」の後半期、千葉県「堀之内 1 式」の後半期と多くの共通する特徴を有しており、大きな地域差は見出せない。

山居遺跡では、縄文時代後期前葉の連続的な変化を、SX01 ③北西側遺物包含層の層位における第 IV

群土器～第Ⅶ群土器への変遷として捉えられた。

年代測定を行ったSX01③北西側遺物包含層B2西ベルト包含層Ⅱa層(Sec.19層)中出土の第Ⅳ群土器ISK-3の較正暦年代はcalBC2030(Beta-219642)であった。同様の測定例としては、福島県上ノ台A遺跡の綱取Ⅱ式土器でcalBC1795(PLD-4305)(日本考古学協会2005年福島大会実行委員会2005)、東京都多摩ニュータウンNo.243遺跡の多条沈線文の施される堀之内式土器でcalBC1710(IAAA31095)(東京都埋蔵文化財センター2003)がある。山居遺跡例はこれらの年代と比較して、やや古めの測定値が検出されているといえよう。

#### 〔第Ⅴ群土器〕

第Ⅴ群土器は1～3本の沈線による懸垂文を特徴とし、縄文時代後期前葉の「南境式」(伊東1957)の一部をなすものである。後藤勝彦による南境貝塚8トレンチの分析では第7～8層の「宮戸Ⅰb式」(後藤2004・2005)に相当する。これらの土器は福島県の「綱取Ⅱ式」の前半期、千葉県の「堀之内Ⅰ式」の前半期と多くの共通する特徴を有しており、大きな地域差は見出せない。宮城県中南部においては、土器のみならず関東地方のハート型土偶とほぼ同じ土偶が見られる(主浜2008)など、全般に高い共通性を示している。こうした関東地方の文化の北上傾向は後期中葉まで継続する。

炭化物による年代測定は行ってはいない。

#### 〔第Ⅵ群土器〕

第Ⅵ群土器は胴部に隆線による装飾を伴うものがあり、しばしば隆線上には連続刺突文が施され、いわゆる鎖状隆線文を呈するものがある。文様の交点部分には好んでボタン状貼付文が施されるのも特徴の一つである。こうした土器群は宮城県里浜貝塚袖窪地区の調査でまとまって発見され、1965年に「宮戸Ⅰ式(南境式)」に先行する型式として「袖窪式」(林1965)が設定された。その後、小笠原好彦によって「袖窪Ⅰ式・Ⅱ式」(小笠原1993)の設定も行われている。鎖状をなす連続刺突文は宮城県南部では「称名寺第2群土器」(吉田1960)として、阿武隈川下流域にも確実に分布(相原2008b)しており、これらは並行関係にあるものと考えられる。

炭化物による年代測定は行っていない。

#### 〔第Ⅶ群土器〕

第Ⅶ群土器は隆線による装飾を伴うものがあり、隆線文の交点部分には2個1対の刻目文が施されるものがある。しばしば大型の環状把手を伴うものがある。これらは「大木10式」<sup>(註2)</sup>(山内1937)の一部(藤沼1968、原・馬目1968、宮城県教育委員会1969、宮城県1981、須藤1985)とも、「門前式(小友式)」(江坂1956、江坂ほか1959、吉田1960)、「宮戸Ⅰa式」(隆線・稜線文土器)(後藤1957)、「観音堂式」(大迫町教育委員会1986、本間1994)などと呼称されてきた土器に相当する。標式資料の「大木10式」に見られる初源的な2個1対の刻目文はすでに分析(相原2007)したように、第Ⅶ群土器におけるものとは異なっている。

これらに並行する土器は宮城県南部の柴田町向畑遺跡(芳賀1974)や七ヶ宿町大梁川遺跡(宮城県教育委員会1988)等においては、宮城県北部とは異なる様相が把握されている。大梁川遺跡では「称名寺第1群土器」(吉田1960)の範疇で捉えられる後期初頭の住居跡他が検出され、他の遺跡においても同土器の出土を確かめることができる(相原2008b)。現在、縄文時代中期と後期の境界を、「称名寺第1群土器」の出現をメルクマールとする説が有力(日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会2005)であり、「称名寺第1群土器」との関係は特に重要である。

年代測定を行ったSX01②南側遺物包含層2c層中の出土の第Ⅶ群土器ISK-4の較正暦年代はcalBC2280(Beta-219643)であった。同様の分析例として、岩手県横町遺跡の土器IK4<sup>(註3)</sup>(小林ほか2004)の較正暦年代でcalBC2490-2280(Beta-168196)、福島県高木遺跡の称名寺式第1群土器でcalBC2470-2400(PLD-4335)(日本考古学協会2005年福島大会実行委員会2005)等の測定値がある。山居遺跡第Ⅶ群土器は、福島県側の測定例では、称名寺式第1群とほぼ並行関係にあることになる。現在、有力な縄文時代中期と後期の境をcalBC2470とする見解(小林ほか2003)とも矛盾しない。

山居遺跡では縄文時代後期初頭から中期後葉に及ぶ変化が、SX01②南側遺物包含層の層位において、





第6図 山居遺跡第Ⅶ群～第Ⅹ群土器（縄文時代中期末葉～後葉）（スケール 1:12）

この第Ⅶ群土器から第Ⅹ群土器への変遷として連続的に捉えられている。

〔第Ⅶ群土器〕

第Ⅶ群土器はSX01②南側遺物包含層の第Ⅶ群土器の下位、2d層上面～3a層上面にかけて出土している。

無文部によって楕円形区画文や方形区画文、横位波濤文が配され、文様の交点部分にはヒレ状隆線文が付されるものが多い。メビウスの環のようにひねりの入った環状把手を持つものもある。これらは縄文時代中期末葉の「大木10式」（山内1937）の後半期（相原・加藤1988）と呼ばれる土器に相当する。この

大木10式後半期では、北上川水系域の宮城県北部と阿武隈川水系域の宮城県南部では地域差が認められ、概ね福島県中部までが「大木式」の分布圏（相原・加藤1988）で、福島県南部以南は関東地方の「加曾利E4式」土器が分布している。

年代測定を行ったSX01②南側遺物包含層3a層上面の出土の第Ⅶ群土器ISK-1の較正暦年代はcalBC2580 (Beta-219640)であった。同様の分析例として、福島県和台遺跡の大木10式後半期土器の較正暦年代でcalBC2670-2570 (PLD-4341)・calBC2540-2490 (PLD-4344)、福島県北向遺跡の大木10式後半期でcalBC2565-2530 (PLD-4308)・calBC2565-2520

(PLD-4310)、福島県上ノ台 A 遺跡の大木10式後半期で calBC2540-2490 (PLD-4302)・calBC2570-2520 (PLD-4303) で、山居遺跡第Ⅷ群土器は福島県の大木10式後半期の測定例ともよく整合している。前述の中期と後期の境界を calBC2470とする見解(小林ほか2003)とも矛盾しない。

〔第Ⅸ群土器〕

第Ⅸ群土器は SX01 ②南側遺物包含層の第Ⅷ群土器の下位、3a 層中から出土している。包含層 3a 層は水の影響を受けた粘土層となっており、土器の出土状況は必ずしも良好ではない。大木10式後半期に相当するものと前半期後半(相原・加藤1988)に属するものが混じって、出土している。

〔第Ⅹ群土器〕

第Ⅹ群土器は SX01 ②南側遺物包含層の第Ⅸ群土器の下位、3b 層上面から1個体の土器が出土している。

この土器は口縁部に無文帯がめぐり、胴部には逆 U 字状の文様が沈線文と隆線文によって形作られており、「大木9式」(山内 1937)に相当する。大木9式では、大木10式後半期に見られるような宮城県北部と南部の顕著な地域差は認められず、概ね福島県中部までが「大木9式」の分布圏(相原・加藤1988)で、福島県南部以南は関東地方の「加曾利 E3式」土器が分布している。

年代測定を行ったこの土器 (ISK-7) の較正暦年代は calBC2870 (Beta-220719) であった。同様の分析例として、福島県法正尻遺跡93号住居跡の大木9式前半期の土器で calBC2810-2750 (PLD-4314)、福島県高木遺跡28号住居跡の大木9式後半期の土器で calBC2700-2580 (PLD-4334) などが示されている(日

本考古学協会2005年福島大会実行委員会2005)。こうした測定値と比較して、山居遺跡の土器 (ISK-7) はわずかに古めの値を示している。

5 まとめ

前章までの縄文時代中期末葉から後期前葉を主とする土器編年に関する検討をまとめると、以下の表のようになろう。

研究史的には、縄文時代中期末葉の「大木10式」を後期初頭に位置づける見解も、1959年の江坂輝彌らによる提示(江坂ほか1959)以来、形を変えながら、根強く主張されて来ているのも事実である。しかしながら、ここまで検討してきたように、層位的にも「門前式」土器は「大木10式後半期」土器に続く土器であり、そして「門前式」土器は宮城県内の山居遺跡第Ⅷ群土器や大梁川遺跡の後期初頭土器を介して、「称名寺第1群」土器と並行関係にあることも、大方の理解を得るものであろう。

縄文時代中期末葉から後期前葉の時期は、近年の周辺科学の分析によって、気候の寒冷化が進行する時代であったことも明らかにされつつある。中期末葉における複式炉の大型化や後期初頭の遺跡数の減少などに関しては、こうした文脈から説明が試みられることも多い。しかし、土器型式の分布において検討したように、気候の寒冷化が進む中で、北方のより冷涼な気候に適応した文化が南下するのではなく、むしろ逆に関東地方のより温暖な地域の文化が全く同じではないにしても、北上して来る様相が把握され、気候の変動と文化の動態は必ずしも一致するものではないことも明らかとなった。

	関東地方		東北地方		山居遺跡較正暦年代
	福 島	山居遺跡	宮城県中部～岩手県南部		
晩期中葉			第Ⅰ群土器	「大洞 C2式」後半期	calBC760(Beta-219645) calBC770(Beta-219644)
後期後葉			第Ⅱ群土器	「金剛寺式」	「宮戸Ⅲ a 式」
後期中葉			第Ⅲ群土器	「宝ヶ峯式」	「宮戸Ⅱ a 式」・「宮戸Ⅱ b 式」
後期前葉	堀之内1式	網取Ⅱ式	第Ⅳ群土器	「南境式」	「宮戸Ⅰ b 式土器より新しい一群」
			第Ⅴ群土器		「宮戸Ⅰ b 式」
	称名寺第2群	網取Ⅰ式	第Ⅵ群土器		「袖窪式」
称名寺第1群	第Ⅶ群土器		「門前式」		
中期末葉	加曾利 E4式	大木10式	第Ⅷ群土器	「大木10式」後半期	calBC2280(Beta-219643)
			第Ⅸ群土器	大木10式後半期～前半期後半	calBC2580(Beta-219640)
中期後葉	加曾利 E3式	大木9式	第Ⅹ群土器	「大木9式」	calBC2870(Beta-220719)

表 縄文時代中期末葉から後期前葉を主とする土器編年



(註1) 最も新しい旧河道 SX02の砂礫層は基本的に表土として重機で除去したために、その範囲や流路を明確にすることはできなかった。SX01②南側遺物包含層1層(縄文晩期中葉)上面を覆う砂礫層は当初、第2図に示したように旧河道 SX03A に由来する砂礫層として把握したが、この最も新しい旧河道 SX02の延長と考えた方が、全体の理解としては矛盾しないことが、後日の検討によって明らかとなった。

SX01②南側遺物包含層の上面には、斑状に火山灰が堆積し、その上に問題の砂礫層が検出されている。報告書作成時はこの火山灰を縄文時代晩期の To-b の可能性を考えたが、この火山灰については産業技術総合研究所地質調査総合センターの工藤崇氏のご教授によれば、火山灰であることは間違いのないものの、角閃石が多く含まれ、十和田系とは考えられないとのことであった。宮城県内における縄文時代晩期以降のテフラとしては古墳時代の Hr-FP (榛名伊香保テフラ) が知られており、縄文時代晩期の SX01②南側遺物包含層上面の火山灰はむしろこの Hr-FP と考え、その上部に堆積する砂礫層はその全体を旧河道 SX02の堆積層と考えた方が、遺跡全体の理解としては整合性が高い。

いずれにしても、この火山灰の噴源の同定が待たれるところである

(註2) 『岩手県史』第1巻(1961)は山内清男存命中の出版物であり、「大木10式」は標式資料として掲載された同氏提供による3葉の写真セットのみに限定する。

(註3) 報告中、この土器は「大木10c式土器」、関東地方の後期初頭に並行するものとされ、「大木10式系の土器自体は、後期前葉堀之内式期まで残存するといわれており、IK4

はおそらく後期最初頭に位置づけられよう。」(小林ほか2004)とされた。こうした「大木10式」を中期末葉から後期初頭に位置づける見解はその後も諸説(安達・中村2007ほか)へと継承されているが、少なくとも年代測定の行われた横町遺跡の土器 IK4は、幅広の口縁部無文帯が内折する器形と断面かまぼこ状を呈する隆線文が用いられており、「大木10式」の範疇で捉えられるものではなく、後期初頭の「門前式」の範疇で捉えられるものであろう。

また、後期初頭の「大木10c式(新)」(小林



2004・小林ほか2005)とされた福島県馬場前遺跡 SK1101(山内ほか2003)・馬場小路遺跡2次12・31号埋甕(押山・高松2005)も報告書では「綱取I式」とされており、現状の「大木10式後期説」には土器型式の認定自体に問題がある。

(註4) 最も狭い意味での「門前式」は、このスタイルの土器のみを指す。ただし、岩手県清水遺跡(村上2002)や本遺跡での層位を見る限り、この種の土器だけで「門前式」の「土器型式」が構成されているのではない。

\*本文中に用いた第1・2・4・5・6図は山居遺跡報告書(宮城県教育委員会2007)中のものを転載ないしは一部改変したものである。

#### [引用・参考文献]

- 相原淳一・加藤明弘 1988「考察 土器」『七ヶ宿ダム関連遺跡調査報告書Ⅳ 大梁川遺跡・小梁川遺跡(石器編)』395-455頁 宮城県文化財調査報告書第126集
- 相原淳一 2007「総括」『山居遺跡(縄文時代編)ほか』253-304頁 宮城県文化財調査報告書第214集
- 相原淳一 2008a「編年研究の現状と課題 東北地方」『縄文時代の考古学』2 145-163頁 同成社
- 相原淳一 2008b「阿武隈川下流域における縄文時代後期初頭の土器編年研究序説」『蔵王東麓の郷土誌—中橋彰吾先生追悼論文集—』97-132頁 中橋彰吾先生追悼論文集刊行会
- 安達尊伸・中村 直 2007「門前式の周辺～地域性認識の試論～」『岩手県における縄文文化の諸相 資料集』17-22頁 2007年岩手県考古学会第38回研究大会
- 伊東信雄 1957「古代史」『宮城県史』1 1-171頁 宮城県史刊行会
- 稲村晃嗣 2008「門前式土器」『総覧 縄文土器』536-543頁 アム・プロモーション
- 江坂輝彌 1956「各地域の縄文式土器 東北地方」『日本考古学講座』3巻 91-124頁 河出書房
- 江坂輝彌ほか 1959「各地域の縄文式土器形式編年と推定文化圏」『世界考古学大系1 日本I』巻末折込 平凡社
- 大迫町教育委員会 1986『観音堂遺跡』大迫町埋蔵文化財報告11
- 小笠原好彦 1993「袖窪貝塚出土の縄文後期初頭土器」『宮城史学』特別号(第14・15・16号) 4-22頁 宮城歴史教育研究会
- 工藤 崇・佐々木 寿 2007「十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年」『地学雑誌』116-5 653-663頁 東京地学協会

- 押山雄三・高松俊雄 2005『町B遺跡』郡山市教育委員会
- 熊谷常正 1986「門前式土器の検討」『岩手県立博物館研究報告』第4号 39-61頁 岩手県立博物館
- 後藤勝彦 1957「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器編年について」『塩竈市教育論文』2
- 後藤勝彦 2004「南境貝塚調査の層位的成果Ⅰ 7トレンチの場合」『宮城考古学』6 63-110頁 宮城県考古学会
- 後藤勝彦 2005「南境貝塚調査の層位的成果Ⅱ 8トレンチの場合」『宮城史学』24 1-29頁 宮城教育大学歴史研究会
- 小林謙一ほか 2003「AMS<sup>14</sup>C年代による縄文土器型式の変化の幅」『日本考古学協会第69回大会総合研究発表要旨』日本考古学協会
- 小林謙一ほか 2004「北上市内遺跡出土土器付着物の<sup>14</sup>C年代測定」『北上市埋蔵文化財年報(2002年度)』
- 小林謙一 2004『縄紋社会研究の新視点—炭素14年代測定の利用—』六一書房
- 小林謙一ほか 2005「福島県郡山市内遺跡出土土試料の<sup>14</sup>C年代測定」『町B遺跡』郡山市教育委員会
- 小林謙一 2006「東日本の縄文晩期の年代」『弥生農耕の起源と東アジア』News Letter No.4 国立歴史民俗博物館
- 市立市川考古博物館 1982・1983『シンポジウム堀之内式土器資料集』『シンポジウム堀之内式土器記録集』
- 市川考古博物館 1992『堀之内貝塚資料図譜』市立市川考古博物館研究報告第5冊
- 志間 泰治・桑月 鮮 1991『宝ヶ峯』財団法人齋藤報恩会
- 主浜光朗 2008「大野田遺跡の土偶」『第5回土偶研究会発表資料 宮城大会』3-9頁 土偶研究会
- 縄文セミナーの会 2007『中期終末から後期初頭の再検討』第20回縄文セミナー
- 鈴木克彦 2004「門前式土器様式の編年学的研究—門前様式の再構築と細分指標—」『考古学雑誌』88-4 28-59頁 日本考古学会
- 須藤隆 1985「東北地方における縄文集落の研究」『東北大学考古学研究報告』11-36頁 東北大学考古学研究室
- 須藤隆編 1995『縄文時代晩期貝塚の研究2 中沢目貝塚Ⅱ』東北大学考古学研究室
- 須藤隆 1998『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究 縄文から弥生へ』
- 東京都埋蔵文化財調査センター 2003『多摩ニュータウン遺跡—No.243・244遺跡』東京都埋蔵文化財調査センター調査報告第132集
- 日本考古学協会 2005年度福島大会実行委員会2005「複式炉と縄文文化」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』
- 丹羽茂 1989「中期大木式土器様式」『縄文土器大観』1 346-350頁 小学館
- 芳賀寿幸 1974「向畑遺跡調査概報」『柴田町郷土研究会会報』7号 8-20頁 柴田町郷土研究会
- 林謙作 1965「縄文時代の発展と地域性 東北」『日本の考古学』Ⅱ 河出書房新社
- 原信行・馬目順一 1968「宮城県大木囲貝塚発見の遺物について」『古代』51 31-42頁
- 藤沼邦彦 1968『石巻市沼津貝塚調査概報』
- 藤沼邦彦 1989「亀ヶ岡式土器様式」『縄文土器大観』4 318-324頁 小学館
- 本間宏 1994「大木10式土器の考え方」『しのお考古』10 3-24頁
- 本間宏 2008「南境式・網取式土器」『総覧 縄文土器』544-551頁 アム・プロモーション
- 馬目順一 1968「網取貝塚第四地点発見の堀之内Ⅰ式土器の考察」『小名浜』福島県いわき市教育委員会いわき出張所
- 宮城県 1981『宮城県史』34(資料篇11) 宮城県史刊行会
- 宮城県教育委員会 1969『埋蔵文化財第4次緊急調査概報—南境貝塚』宮城県文化財調査報告書第20集
- 宮城県教育委員会 2007『山居遺跡(縄文時代編)』宮城県文化財調査報告書第214集
- 村上拓 2002『清水遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第382集
- 森幸彦 2008「大木9・10式土器」『総覧 縄文土器』360-367頁 アム・プロモーション
- 山内清男 1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』1-3 139-157頁
- 山内清男 1937「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1-1 先史考古学会
- 山内先生没後25年記念編集刊行会 1996『画竜点睛—山内清男先生没後25年記念論集—』
- 山内幹夫ほか 2003『常磐自動車道遺跡調査報告34』福島県文化財調査報告書第398集
- 吉田格 1960『東京都武蔵野郷土館調査報告書 第一冊 —横浜市称名寺貝塚—』武蔵野文化協会
- 吉田義昭 1960『門前貝塚』盛岡市公民館